第17回対照言語行動学研究会　口頭発表 概要

2018. 9.29　於 青山学院大学

|  |  |
| --- | --- |
| タイトル | 主観的把握と〈自己のゼロ化〉―日英語のモダリティをめぐって― |
| 著者名（所属） | 黒滝　真理子　　（　日本大学　）　　　　　　　 |
| 連絡先Eﾒｰﾙ | kurotaki.mariko@nihon-u.ac.jp |
| 論文内容　認知言語学的観点からみた対照研究において、その根底には「言語によって好まれる事態把握は異なる」という考え方が既に定説となりつつある。本発表は、池上（2006）の事態把握論に依拠しつつ、日英語のモダリティの捉え方や概念の相違に認知スタイルの異同が関連していることを考察していく。日本語において、体験者である話し手は明示されず、体験の場の〈イマ・ココ〉に視座を置き、体験そのものが〈見え〉のままに言語化される。推量文でも推量する主体は言語化されず〈自己のゼロ化〉が起こっている。この「見えない認知主体」を知る手がかりがまさにモダリティにある（黒滝2013）。また、日本語の特性を語るうえで欠くことのできない現象文や「ナル表現」（池上1981）も、日本語話者の主観的把握と関連がある。「ナル表現」の表す状態性を「体験された出来事」として捉える目的でevidentiality（証拠性）のモダリティが使われる。evidentialityには状態を出来事に見立てるような機能がある。「知覚の営み」としてのevidentiality／mirativityにも〈自己のゼロ化〉が起こり、これらは体験的に事態を把握する主観的把握といえる。さらに、〈自己のゼロ化〉は主観的把握への強い傾斜であるため、日本語では〈自己のゼロ化〉が起こりやすく、一方英語では起こらないと従来言われてきた。しかしながら、客観的把握の傾向が強い英語にも〈自己のゼロ化〉は起こり得る。本発表では「どの言語にも〈自己のゼロ化〉つまり、主観的把握があり、その程度に差が見られるのではないか」という問いをたてた。この問いが発する新たな地平をモダリティにより模索してみたい。参考文献池上嘉彦(1981）『「する」と「なる」の言語学―言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店池上嘉彦(2006)「〈主観的把握〉とは何か―日本語話者に〈好まれる言い回し〉」『言語』35-5. 20-27. 大修館書店黒滝真理子(2005)『DeonticからEpistemicへの普遍性と相対性－モダリティの日英語対照研究－』くろしお出版黒滝真理子（2013）「日英語の事態把握と間主観的モダリティ―Potentiality, 状況可能とEvidential Modalityの観点から―」.『認知言語学論考11』313-345, ひつじ書房 Langacker, R. W. (1987) *Foundations of cognitive grammar 1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford Univ. Press.Palmer, F. R. (1990) *Modality and the English modals*, *2nd*, London: Longman. |